

「名前のない星」戯曲賞 講評

諏訪こぼと

本企画の選考委員のオファーをいただいた時から、自分の作品を見つめ直す機会になるだろうとは思っていましたが、ここまで各作品から、そして選考会から影響を受けることになるとは。それはご応募いただいた方々の作品が素晴らしかったからに他なりません。もちろん、各々に足りていないところや、もっと磨けるところがあったかもしれませんし、我々が見落としていることもあるでしょう。しかしまずこのような場所が生まれ、実現できた時点で、少しだけ未来は明るいと思います。ぜひ他の演劇人の方にもっと見つかってほしい企画です。ありがとうございました。

選考会でお話しさせていただいた各作品の評について、改めてまとめさせていただきました。最終選考の作品達、私自身はこんなに面白い作品達を書けないなあと思いながら書かせていただきました。特に『宇宙家族』『首の皮一枚』はより多くの元に届いてほしいと願っております。

『雨をぜんぶ飲んだら砂漠にならない』

私は二次選考の際にこの作品を強く推した。それは他の選考委員はもしかしたら推さないかもしれないというのも折り込み済みだった。こういったものを評価するのはとても難しい。高校の演劇部で以前上演された創作脚本で、生徒達本人が演じているから良い部分が多いだろう。ただ、それを凌駕するエネルギーがこの戯曲自体に乗っていると感じた。それは、やっぱり面倒な世の中で、生き抜くことについて描くことを真正面から挑んでいるからだと思う。ただ欲を言うなら、もっと長尺で、勢いだけでなく丁寧さのある作品として読みたい。

『宇宙家族』

家族の描き方は倫理的に引っかかる要素も多いが、それをも今この世に存在する家族を描いているように感じた。文章なのに宇宙の美しさ、壮大さ、孤独感がありありと伝わる。理由について考えていたが、会話や、クシャミで会話を表現するパートなどギミックが沢山あり、それも宇宙を表現しているだろう。さらに、選考会でキャメロンさんから出た「引きの絵」に関するお話もかなり要因になっている。これはセリフ運びやシーン作りの上手さが光ったと言える。また、この作品の面白さは常にそこにいる火星(ナレーター)の台詞によるものも大きいだろう。この距離感で語り手がいてダサくならないのは、その台詞回しや家族の会話への差し込み方によるものだと思う。

『エゴイズムでつくる本当の弟』

タイトリングがまず、とても良い。この作品を見る前の看板にもなれば、見た後のまとめにもなる気がする。内容に関してだが、読んでいると心がぎゅっとしてしまうシーンもあるがそこも含めてとても暖かいお話だった。ただ、コメディとしては少し不足しているのではと感じる。端々に小ボケがあるが、どのようなバランスで書きたいのかが読み取れなかった。また、他の作品でも言えるが、ト書きの書き方について、これがベストなのかは考えなくてはならないと感じる。かなり詳しく舞台装置について書いているが、これは上演台本過ぎるのではないだろうか。どちらかというとうるような場所を表現して欲しいかの説明や、俳優達の心理について描くべきではと感じる。

この作品が、暖かく書かれているのは何か家族で悩んでいる人の救いになるのではと思った。特に光郎の在り方には中々心惹かれるものがある。

『首の皮一枚』

一次選考から読ませていただいております、その頃から光る作品だと感じていた。一般社会でも生活をしているはずの一家だが、自宅でのシーンのみで構成しており、トーンが到底外で働いている感じがしないのが面白い。読み進めていく事に何だか体調が悪くなる感じが良かった。ト書きが少なく、人物の感情のほとんどをセリフから受け取るというのもこの作品の気持ち悪さを描いている部分の一つではと感じる。また、その会話内容も意思疎通が出来ているが、内容が私達の生活とはズレがある。なんだか悪いことのように書いてしまったが、これら一つ一つがこの作品の心地の悪さを作り、書きたいことを書けていた。

『浮遊感』

『ゴルゴンダ』を見せながら始まる作品。不条理演劇としての世界観をよく作れていると感じる。また、私自身も精神や魂の浮遊感のようなものは私も感じる日があるが、このような表現はとても面白かった。ただ、書きたい内容に対して尺が短いようにも感じる。この男1のバックグラウンドを尺をかけて書いてほしいと感じたのだが、果たしてそれが良い作品に繋がるのか、私も答えが出ていない。

『夢みる浴槽』

世界観の作り方が上手く、甘くて美しい話である。浴槽・人魚・夢だけでなく、登場人物の名前や「サンタ・ルチア」もそれを作っているだろう。また、夢との距離感が様々な人間を描くことで夢を追ったことのある人間ならば誰かに当て嵌めて読んでしまうような作品であった。好きなものを、好きと夢だと言える人間を応援してくれるような作品。

『雪の雫』

性暴力を描くというのはかなり苦しいものがある。特に目の前で明確に表現するのは様々なリスクがあり、読むのもかなり苦しかった。女性という立場でみるのであれば、これは理想的な最悪な女の子だと思う。ただ、起こる出来事のインパクトにしてはその事象や、それに関する人物達の心理描写は足りていない気がする。この作品がかなりセンシティブなものを描いている以上、不足してていいかは怪しい。ただ深い感情を出さないまともでもないことを起こしたり受けたりしてしまう人間がいるかいないかで言えば、いるだろう。近年そういった作品はあるが、その中では新しさに欠けるように感じる。悪く書くことはいくらでも出来てしまうが故に、どう描くかでその人の力量をみたい。

『ランジェリーナ』

構成やそのコメディ、奇想天外な設定に驚かされた作品だった。あっちこっちから面白い設定を載せていくのは清々しい。また、ランジェリーを着たい夫と、受け入れ難い妻のバトルは面白かった。妻の拒否感に、私が拒否感を起こしそうになったのだが、バトルや、そこに至る流れを読んでいると段々どうでも良くなってしまうそんな作品でした。